

焰

原民喜

青空文庫

雪が溶けて、しぶきが虹になった。麦畑の麦が舌を出した。泥濘にぺちやぺちや靴が鳴る。をかしい。また春がやって来る。一年目だ。今度こそしくじつたら台なしだ。だけど三百六十五日で、やつぱし、ぐるりと廻るのだな。イエス・クリストよ。ヨルダンの河でどんな河なのかしら。

たった二三時間、二三枚の紙に書いた、書き方が下手くそだったので、一年間遅れるんだよ、僕は。それが負け惜しみと云ふものだ、と矢口が云ふ。矢口はもうすぐ中学へ通ぶのだから僕より偉がるのだ。話を変へなきやいかん。君の今度はいった中学のポプラは素敵だね、大きいね。いいや、一寸も大きかないさ。もっと大きいのが何処にだってあるさ。ちよ、楯突いて来るのだな、僕が落ちちたから、馬鹿にされるのだな。仕方がない、もうすぐお別れなのに、名残惜しがらないのだな。オヤ、あんなところに目高があるよ、君。

やい、やい、試験に落ちた大目球、一年下の三浦が皆の前で冷かした。三浦の柔かさうな頬ぺたを視つめながら、康雄はポケットのなかの拳骨を握りしめた。しかし、ぶっ放さ

なかつた。

外でも家でも康雄は面白くなかつた。家では母に癩癩玉ぶつ放した。切出小刀を掴んで切腹しかけると、母が火のやうに怒つて飛びかかる。小刀が落ちて炬燵の角で頬を打つた。それが痛さに康雄は泣く。死んだらもつと痛いのかなと思ひながら炬燵で足を温める。すると何故さつき自棄起したのか、忘れてしまふ。中学が一年遅れたこと位どうだつていいぢやないか、趾の裏が今温い方が氣持がいい。

康ちゃんのいけないのは何だと思ふ。さあ、沢山あると思ふ。そのうちでもよ。さあ。忍耐強くないことよ。さう云つて姉は大切なことを説き出した。それが何時の間にか、アダムとイブの伝説に移り、クリストの話になつてゐた。汝の敵を愛せよとクリストは仰つたのです。大きな愛の心でこの世を愛すると、何も彼も變つて来ますよ。

その話を聴き終つてから康雄の頭は急にすつきりした。姉の病室を出て、病院の庭を散歩してみた。中央の池のなかの芝生の島に、女の児がハンケチを持って、風にゆらぐハンケチに犬が戯れてゐた。絵のやうだ。なるほどこいつは世の中がさつきとは變つた。再

び姉の病室へ戻ると、ペットに横になった姉は大きな眼で康雄を視つめた。姉は青空のやうに澄んだ眼をした。さうだ、これからは何でも怵へて、姉さんの云ふ通りにならう、と決心すると康雄は胸が小躍りして来た。

その夕方家へ帰る途中も、胸の鼓動は病院からひきつづいてゐた。細く遠くまで続いた街の果てに、春の夕方の雲が紅く染まつてゐた。その筒のやうな街を急いでそはそはと康雄は歩いた。神様でものはあつたのだ。長い間の疑問が解けて来た。康雄はそはそはする空気のなかで、始めて密かに祈つた。と、小路から三浦が追駈けて来て康雄に声を掛けた。三浦はニコニコ懐しげに彼を見た。たつたこの間撲らうかと思つた奴だが、康雄も笑顔になつた。

台所で康雄は姉にだけ打明けた。僕はこれから優しくなるよ、誰とも喧嘩しないし、君だつていぢめない。小さな姉は不審さうに黙つて彼を眺めてゐた。が、二三日して妹はふと云つた。ほんとね、兄さんは大分變つた。さう云はれると康雄は急に偉くなつたやうに嬉しかった。家の手伝ひでも、掃除でも素直にした。三度の食事の前に祈り、朝夕も祈つた。

春休みが過ぎて学校が始まった。高等一年の組は二階だ。新しく編入された康雄は識つた顔が少ない。高が康雄の顔見て肯いた。君もゐたのか、二人は運動場の隅っこで話合つた。芭蕉が芽を出してゐた。君、聖書つてももの知つてるかい。知つてるとも、聖書なら僕のうちにあるんだよ。ほんとかい。ほんとだとも、何なら明日君に持つて来てあげるよ。呉れるのだね。うん。高は孤児だと云ふ噂だが、聖書持つてるとは思へなかつた。それで君は信者かい。ううん、ちがふよ。高は青白い顔にぼんやり淋しさうな笑みを浮べた。

翌日高はほんとに聖書を持つて来た。クロス張りの、小型の、赤縁ふちのバイブルは康雄のポケットに納められ、表紙を爪で小擦ると、ビュー・ビューと唸つた。

昼飯の時間に級長が授業料を集めて廻つた。次の時間の始めにそれを舟木先生に渡さうとすると、さあ五拾銭足りない。集めた時には勘定が合つたのに、休みの時間に足りなくなつたのだ。四十人の机の隅から教壇の端まで探して、今度は身体検査だ。皆が廊下一列に並んで、先生がポケットを裏返しにする。康雄のポケットからはバイブルが出て来た。先生は表紙をほんと指で弾いて、君これ読むのかいと訊ねた。ベルが鳴つた。次の時

間は体育だ。皆運動場へ立たされた。またベルが鳴った。先生は怒つてゐた。出て来るまでは皆帰さないぞ、たった一人いけぬ奴があるのだ、誰だかそいつはわかつてる筈だ。しかし誰も返事しない。皆済まなさうな顔だ。舟木先生の後にはアカシアの樹があり、その梢に白いちぎれ雲がある。神様！ と、じりじりし出して康雄も祈る。僕が皆の犠牲みかほりにならうかしら、でも盗んでゐないのに盗んだとも云へないし、ええ、一そのこと僕が盗んでやればよかつた。

今、君とこの前でこの拾銭拾つたよ。日曜日に高が康雄の家を訪ねて来た。警察へ持つて行かうか。めんどくさいから菓子買って食はうよ。二人はぶらぶら盛り場の方へ歩いて行つた。博覧会で人出が多い。バナナ・キャラメルを買つて分けた。頬をもごもごさせながら矢口の家へ行つて物干棚に登つた。隣りの活動小屋からチャンバラの囃子が聞えた。矢口は英語のリーダーを出して二人に見せた。つるつる白い紙に真赤な苺の絵があざやかだ、その端にべつたりインクの指紋がついてゐる。物干棚の上を大きな鳥が飛んだので影が本に映つた。と、紋白蝶がヒラヒラ飛んで来た。

君はこの虫眼鏡知らないか。知りません。理科教室に一人で勝手に入ったことはなかったか。ありません。山野と今日昼休みに遊んでたのだらう。さうです。康雄は不思議さうにその虫眼鏡を見た。あれで習字の字が焼けるのだからなあ、しかし如何した間違ひだらう。よろしい、山野はこれが君のポケットから落ちたと云ふのだがね、よろしい、君は帰ってよろしい。舟木先生に許されると、康雄はどうして一人残されたのかまだ不審だった。山野と今日廊下で纏れ合つて巫山戯たのはほんとだが、すると虫眼鏡が落ちたのかしら。すると僕は賊なのかしら。すると僕は知らぬ間に賊になったのかしら。いや、うかうかするとなるかも知れぬ。もし来年の入学試験に失敗したら、それこそ駄目になるぞ。しかしほんとに勉強しさへすれば中学へ入れるのかしら、それはほんとかしら……。康雄が考へつめながら帰つてゐると橋の袂で女学生と出逢つた。もと同級だった女の子が急に大人びて、風呂敷包みなんか抱へてるではないか。女の子は胸をまっ直ぐにして歩いて来て彼を見て、も素知らぬ顔だ。康雄は尻にブランブランするカバンを情なく思ひながら、橋の欄干をトントンと掌で叩いて、河のまん中に唾吐いた。もう何度この橋渡らなきやならぬか、渡る度に思ふことを思つた。

然れど我なんぢらに告げん、婦女を見て色情を起すは心すでに姦淫したる也。姦淫てどう云ふことなのか、康雄は変な気がした。

母が姉の病院へつききりで昨日から帰つて来なかつた。その夜も帰つて来ない。夜更けて康雄は睡れなかつた。トントンと表の戸を叩く音がする。康雄は急に蒲団のなかに頭を潜らせた。女中が彼を揺ると、彼はううんと態と呆とぼけた返事をした。

姉は骨になつて桐の小箱に収められた。骨のなかに混つてゐる金歯を掌にすると、義兄もほろりと涙を零した。葬式にまつ白な百合の花環に黒いリボンが結ばれてゐた。白い花弁は五月雨に濡れた。雨に煙る銀杏樹や、寺の大きな甍を仰ぎながら、康雄は姉が天国へ行くのを懐つた。しかしそこは真宗の寺だつた。

蓮華町の角からこの間の晩人魂がふわりふわり出てね、と教室で誰かが喋つてゐた。雨の休み時間で皆は教室にゐた。蓮華町には姉の墓がある。康雄は姉がその人魂ではないのかしらと思つた。姉は西洋の小さな風景画を持つてゐたが、青い夜空に茫とした白い塊りが浮いてゐる、それを姉は幽霊だと云つて怖がつてゐた。夏の夜など康雄に怖い話を語

つて聞かせながら、ふと月の光が籐椅子の縞を彼女の白い肘に染めてゐるのに気づくと、蛇ではないかとほんとに怖れるのだつた。腹に水の貯る病気で死んだ姉、よくものを怖れた姉、まさかその姉が幽霊になりはすまいが、康雄は不思議な気がした。彼の父は姉より二年前に死んでゐた。つきつきに死ぬる、死んでどうなるのか。天国を信じようとしても、もう以前のやうに気持がすつきりしなかつた。

夏が来て、東京から兄と嫂が帰つて来ると、妹と母と五人で遠くの温泉へ行つた。濃い色の海がすぐ宿屋の二階の縁側から斜に見えた。正面には山が見え、一きは恰好のいい山が一つ、その青い肌には霞が何時も動いてゐた。下の通りを瞰下すと、店頭の九官鳥を人が立留つては興がつてゐた。絶えず人が通つた。ある夕方皆がおぼしまに凭れて下を眺めてゐると、めかした小肥りの女が女の児に風船玉を持たせて通つた。淫売だよ、と兄が嫂に呟いた。淫売、その言葉の響が康雄には変に思へた。

夜の海岸は艶歌師や香具師で賑やかだ。康雄の妹ぐらゐの幼い女の児が、三味線に合はせて、身をくねらせて踊る。その顔が白粉でまっ白だ。意味は康雄にははつきりしないが、何だか恥しきうなことを、この娘は平気で踊るので、それが厭らしいやうにも、可愛想に

もなる。大人達は平気で相好を崩す。時には彼も大人の真似をしてニヤニヤ心で笑つてみたりするのだ。

まだその温泉に浸つてゐるやうな気がした。と、夏の日の出来事が急行列車のやうに康雄の頭を通過した。パイと汽笛が鳴る。これはほんとに汽車かな、と思ひながら暫く頭が茫とする。今度は三味線がぼつんぼつん鳴つて、女達が奇てれつな踊りをする。小娘の癖におっぱいがぶらぶらしてゐる。乳豆から矢鱈に数字が飛出して、その数字の加算は暗算では出来ない。パカ、パカ、パカ、と外を裸馬が走る音が、バカと罵る。

しばらくすると康雄の熱は下つた。すると今度は寝てゐる枕頭の夕ぐれの襖が眼に佗しい。彼は母を呼んで電燈を点けてもらふ。耳が冴えて小さな物音が一つ一つはつきり聴取れる。たった今風邪薬をもらひに出掛けて行つた女中の下駄の齒が敷石に触れてくくと云つてゐる。外は寒いのに出掛けるのはつらいだらう。ねえやんも寒いのに外にお使ひに出るのは退儀ぢやないかしら、と康雄は大きな眼で母を視つめる。それは退儀でもさうしなきや仕方がないもの……と母が答へる。

つまり世の中は金だよ、金さ、金さ、何も彼も金さ、と吉田が云ふ。金と女さ、と山野

が云ふ。康雄は解つたやうに笑ふ。高も笑ふ。日あたりのいい、風のあたらない校舎の隅で四人が議論してゐるうちに、山野はボタンを一つ振り除つた。あは、うまくとれちやつた、裁縫室へ持つて行つて女の児につけてもらはう。山野がおどけた顔で走つて行く。吉田もついて行く。しかしクリストはあんなこと云はなかつたよ、と康雄は高に呟く。高は曖昧に笑ふ。孤児の高はひよわい身体してゐるし、時々どこか皆と異つた不思議な表情をするのだつた。

正月が過ぎて齡が一つ増えると、もううかうか出来なかつた。しかし試験にはどうせ六年生に出来る問題が出る筈だから、それが甘げつたらしい。甘げつたらしいのに失敗つたら猶更、阿呆だ。しかし、イエス・クリストよ、何故中学校なんかあるのかしら、天国にもやはり学校なんかあるのかしら。康雄は高が少し羨ましい。高は中学へ行かないですぐ世間で働くさうだ。その方が気楽かも知れないが、何だか怖いやうな気もする。豆を噛りながら新聞を読んでゐると、強姦て活字がある。よくは解らないが、世の中は罪惡だらけらしい。

吉田が芸者にやるのだと云つて、変なことを紙に書いてゐる。皆がそのまはりを取巻いてワイワイ笑ふ。吉田はいよいよ凶に乗つて鉛筆を舐める。そこへ舟木先生が音もなくやつて来た。その手紙を振ぎ取ると、先生は教壇へ上つた。先生の顔がさつと変つた。さあ説教だ、と皆は待ち構へて席につく。しかし先生は暫く口をきかないで一同を睥んでゐる。大變な劍幕の上に、大變なことを云はうとするらしい。

變だ、變だと思つてたら、矢張り大變なことだつた。皆この頃どうかしてるのだな。実に恐しいことだ。何故君達は小学生の癖に女なんてことを考へるのだ。ええ、君達はまだ面白半分に誰か馬鹿野郎の真似してるのだらうが、これだけはよく知つて置き給へ。君達も近いうちに世の中へ出るのだから、よくよく憶えて置き給へ。凡そ世の中から落伍したり失敗したりする人間は、すべてみんな女が原因もとなのだ。人間が腐敗したり、墮落する第一歩はみんな、みんな女からなのだ。とにかく女は敵と思つてゐれば間違ひはない。實際恐しいことだ。君達の年頃でもう女の何のて以ての外だ。それから吉田、君は今日残つてゐる給へ。

康雄は四畳半の勉強部屋に坐つてゐた。生暖かい雨がぼたぼたと軒を打つ夜だ。風が吹

くと雨の音がさあつと乱れる。その風も暖かい。湯上りの所為ばかりではなく、二月と云ふのにまるで春のやうな、雨の音を聞いてみると何だか恍惚とする。庭の草もこれで芽を出すのだらう。雨がぺちやぺちや枯木を舐めてゐる。いや雨はぺちやくちや喋つてゐるのだ。そのお喋りを聴いてゐると、試験準備のことを忘れる。眼の前の青い壁は電燈の明りで雲母の破片がキラキラ光つて、まるで大空の星のやうだ。神様、僕に鼻肩して試験を合格させ給へ。ええ、くそ、ふんわり、ふんわり歌でも唱ひたくなる。この間街角で犬が交尾してゐた。犬は鼻を笛のやうに鳴らした。しかし僕は羽根が生えてふんわりふんわり飛んで行きさうだ。羽根が生えたら天使ぢやないか。天使の顔はみんな女で、眼なんかまるで夢のやうだ。雨の音がひどくなつた。縫つてゐる机が何だか船のやうに想へる。船は温泉場を後に夜の海を進んだ。まつ黒な波が舷に噛みついて、その船が揺れた。大きな波と波の谷間に人魂が出た。その青い光が姉の顔になつた。姉さん、御免よ、——しかし何を詫びてるのかはつきりしない。アーオ、アーオ、おや、この雨に猫が屋根で啼いてやらあ。

吉田が真先に走つて山野と康雄と高が続いた。早く行かないと燃えるところが見えない

てので、皆一生懸命だ。火葬場の縄張りのところへ来ると、康雄はハアハアと呼吸をきらせた。呼吸がきれて咽喉がヒリヒリした。しかし火事はまだ終ってゐなかつた。柱がみんな黒焦げになって、壁が落ちて向ふが透いて見えた。焰がめらめらとあちこちから舌を出す。昼の火事で陽炎が出来、空が不思議に美しく見える。四人とも感心して声を放たぬ。やがて焰が全部消え、消防が去ると、四人は始めて帰らうと気づいた。夜の方が奇麗だね、と高が云ふと、××××××××××××、と吉田が云つた。火事場の陽炎がまだちらちらと眼の前にあるやうな気持で、康雄は何も云はなかつた。

青空文庫情報

底本：「普及版 原民喜全集第一巻」芳賀書店

1966（昭和41）年2月15日初版発行

入力：蔣龍

校正：伊藤時也

2013年1月24日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

焰

原民喜

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>